

水牛通信

VOL.5 NO.7
毎月1回・10日発行
定価200円

人はたがやす 水牛はたがやす 稲は音もなく育つ

からだ スラチヤイ・ジャンティマトン 2

ワイラード盲目病棟 藤本和子 9

1 白樺病院の「高砂」

2 かげりもない、パネイの夜ふけに

3 ボランティアの晩餐会

水牛楽団のページ 32

からだ

スラチャイ・ジャンティマトン

スラチャイの短篇は、彼の思い出と空想の世界を綴ったものだ。彼のいとこの作家サティアン・ジャンティマトンは、彼の初期の作品を評して、「初期印象派の絵のように、感じたままを表現している」と言った。今月は、若き日のスラチャイをほうふつさせる作品を選んだ。一九七二年の作品。(訳者——莊司和子)

けだるさをひきずるようにして、セーンは十段ばかりの階段をのぼっていった。このとき急にけだるい気分になったのではない。このころの彼はいつもけだるく感じていたのだ。立っていても、歩いていても、横になっていても、坐っていてもだ。話していたり、考えていたり、何か食べているときもなのだ。

階下の広間では、中年の中国人が三人、立ち話をしている。三人とも大柄で押出しがいい。二階では若い男たちが何人か、女たちのいる部屋を見てまわっている。ここの商品をセーンも見に来たことがある。けれどもそのときは金がなくて、試してみなかったのだ。今日は十分な金がある。彼は、ほっ

としたように自分のズボンの中の財布をさぐりながら、一番目の部屋に見いった。

色白でふくよかな女が二人、けだるそうに横になっている。彼の方には一瞥もくれないで、目を閉じて手を組み合わせたままだ。一人は、花模様の下着が見えるほどに足を開いている。軽い咳をする

と彼女は、一瞬彼の方を横目でチラッと見やって、またすぐ興味がなさそうに目を閉じてしまった。彼は気分を害して先へ進んだ。次の部屋もさつきと同じような具合だった。まだまだ面白くない——と彼は思う。次の部屋には五、六人の女たちがたむろしている。彼女たちは、男どもが手すりにつかまっただけのざきこんでいる様子を見て、からかうように笑いあっている。自分の商品をすっかり広げてみせてくれる女もいれば、着替え中の女もいる。さもうまそうにうどんを食っている女もいる。セーンは、一人一人の女のしぐさをじっと見さだめてから、一人を選んだ。

「大部屋の紫色の服を着た女がいい」

と、彼は中国人の主人に告げた。それから声をひそめて訊く。「どの部屋使えるの？」

その中国人の爺さんは、丁重に彼をひとつの部屋の前まで案内すると、「五〇パーツ」と言った。セーンは金をつかみ出して渡すと、その部屋に入った。ワオ、すごく居心地のよさそうな部屋じゃない……と、彼は思う。真四角な部屋で、壁は淡い緑色だ。もしも自分の部屋だったら白がいい。ベッドも白、バス・ルームも白。それから壁に油絵をかけて、本棚を置いて、売春婦と結婚して。部屋の中をひとわりながめてから、シャツとズボンを脱いで、やわらかいベッドの上に横になると、彼は、こんなことを思いめぐらしながら一時の妻を待った。

身につけていたものをもってしまおうと、セーンはしあわせに感じた。子供のころにかえって、はだかになって日の光や風をあびたい。何も身にまとわない、生まれたままの美しい姿で。完璧にととのった姿かたち。ほんのひとときの間に、彼の空想は広がり、しあわせな気分になる。

彼女はドアを開けて、何も告げずに入ってきた。視界の中に紫色がパッと飛びこんできたように、彼は感じた。彼は気はずかしくなった。彼女が、はだかの彼を見て目をそらしたからだ。セーンはい

そいでふとんにうつぶせになると、彼女にはほえみかけた。彼女の方でもほえみかえしてきた。

「おいでよ……君、なんて名前なの」

「ペン……ドゥアンペンよ」

と、彼女が答える。それからきまり悪さをかくすように鏡の方を向いて、所在なげに、髪をなおしたり顔をいじったりしている。

「ぼくはセーンっていうんだ。君のことが気に入ってる。こっちへおいでよ……いっしょに寝ながら話そうよ」

ひとりごとでも言うように彼がつぶやく。

彼女は近寄ってきて、ベッドの端に腰かけると、ジッパをおろし始めた。

「やってあげるよ」と、彼が言う。

彼女の肌は白かった。彼の目を最初に射たのは、この白さとふくよかさだ。さわると心地よかった。

香水の匂いがほのかに彼の嗅覚をくすぐる。

「きれいな髪をしているね」と彼が語りかける。

「ピンをはずしたほうがいい」

ぼくは長い髪をたらししているのが好きなんだ、と彼はこころの中でつぶやく。

彼女は何も言わずに、彼がすままにまかせている。長い髪が彼女の背中にひろがった。セーンはうつろしたように、その髪をまさぐった。

「女の髪って美しいな。ぼくは髪の長い女が好きなんだ」。彼は大きな声で話そうと思っていたのに、低い声しか出なかった。

「あなたの髪はどうなのよ」と、彼女も口をはさんだ。

「すっかりのばしちやって、そのうえパーマまでかけちゃって」

彼女はさもおかしそくに彼の髪を見る。

「パーマなんてかけてないよ。これ生まれつきなんだ」

そう言いながらも彼は、まだその女の髪をなでている。

えりあしには細いやわらかい毛がはえていて、ほくろがひとつあった。赤というわけでもなく、黒ともいえないような色の。耳は薄くてやわらかい。耳のかたちが不思議に美しい。セーンは、見とれたようにうなじをさすった。

「ペン」

彼はささやくように女の名前を呼んだ。彼女がちらつとふりむく。

「横になりなよ」

彼は女のからだをそつとふとんの上に寝かせた。彼女はかすかに笑みをうかべた。

枕の上で、彼のくしゃくしゃのちぢれ毛が彼女の額とぶつかりあう。広くてきれいな額だ。うぶ毛が丘の若草のようにはえている。セーンは、目の見えない人間がするように、手でさぐった。

眉。彼女は眉毛を少し残して、あとは眉墨で書いている。それから瞳。なんと不可思議なもの、人間の瞳っていったいなんだろう、と彼は思う。子供が遊ぶガラス玉のようで、澄んだ水をたたえている。彼女の二つの瞳は光っていて、はだかの彼の姿が写っていた。

「眼を閉じて」

彼は、はっきりした調子で言った。言いながら指は、彼女の両方の眼を閉じている。

ぼくだけが君を見ていればいい。君はぼくを見てはいけない、とセーンは思う。

鼻は小高い丘だ。均整がとれていて美しい。彼は自分の田舎にあった丘を思いだす。子供のころの彼が友だちといつも遊んだ丘だ。はだかの子どもたちは、丘のてっぺんまで駆けあがると、誰が大将になるかで競い合う。丘の下は田んぼと小さな沼だ。うっかりとそちら側に立ったりすると、うしろからつき落される。それーっ、それーっ……。セーンはわんぱく仲間を力いっぱいつき落とす。押された子どもは泥まみれになりながら丘をころがり落ちていく。ホオオ……。彼はターザンを真似て勝

関をあげる。その時、別な一人がうしろから近づいてきて、セーンを思いっきりころがすのだ。丘をごろごろころげ落ちて、浅い沼にはまったころには、上の方から勝関をあげる声が聴える。ワンパク仲間たちは、日が暮れるまでこんな風にして遊び続ける。

思い出の中で彼はさらに夢を見る。夕暮どきの弱いやわらかい日ざし。空の色もいかにも涼しげだ。鼻の穴の奥深くにはいったい何があるのだろうか。彼は八頭の竜が棲んでいるところを思い描く。探險家の彼が、刀を下げて入っていくと、毒のある火を吹くのだ。でも彼は死なない。彼がそれを退治するのだ。もうひとつの穴には、大盗賊の宝物がある。彼らは死んでしまつて宝物と骨だけが遺っている。多分巨大なへびが宝物を護っているだろう。それは化けもので、彼が殺すと、洞窟がくずれ落ちてくる。宝物をとってどころか、彼自身が逃げおおせることさえできない。

セーンが彼女のふっくらした頬をなでている間、彼女はしっかりと口を閉じている。二つの瞳にいぶかしげな光が宿りはじめる。もの問いたげな様子を察して彼は言った。「何でもないよ、ペン。君は黙って寝ていればいい。」

清潔な首から胸。二つの乳房の真中へんに、ほくろが二つある。ほんのり赤みをおびたふくよかな乳房をしている。ちょうど熟しかけたチョンプー〔熟すとピンク色になる果物〕のようだ。セーンは、手の中の風船に夢中になっている子供のようになり、彼女の乳房にさわってみる。

どうしてなのかい

女、乳房、乳、子供、吸う、つかむ

どうしてなのかい

どうしてこんなに完璧なのかい

瞳が二つあるように、乳房も二つ

肋骨が二つずつあるように、鼻の穴も二つ

へそがひとつしかないように、口もひとつ

腕が二本あるように、耳も二つ。

「君が好きだよ、ペン。だからもうちよつと見ていてもいいだろう。君のからだは、ルノワールの描く女みたいなんだ。ルノワールって知ってるかい。フランス人の絵かきでね。ぼくだって彼の作品について書いたものをちよつと読んだだけなんだ。誰が書いたのかも覚えてないよ。ルノワールが女を描いてるところだって見たことがない。ルノワールと話したことだってないのさ。どうして彼のことなんか思い出しちゃったのかな」

セーンは彼女の腹のふくらみに手をやった。それから肉づきのよい腰、ふともも、ふくらはぎ、足の爪へとまさぐっていった。

いったいどうやってできたのだろうか。自然の生んだ奇跡。自然の生んだ秩序。もしも神様が人間を創ったというのが本当だとしたら、神様も、こんな完全な形ができあがるまでには、科学者みたいに何度も何度も考えたにちがいない。神様は人間がなれるもののすべてだ。ところで神様って何だ。誰が神様を創ったんだ。

「どうでもいい」これ以上考えるのはやめよう、と彼は思う。

セーンは、蟻のように小さな動物になつて、はだかだ彼女の上を走りまわりたいと思う。鼻の穴の中に入つて、宝物があるかどうか探険するのだ。髪の毛のジャングルの中の冒険。それからあごを降りて、首の上で休けい。首をそのまま下りて溝を通ると、こんどは乳房の丘に登る。それとも乳房の間の狭い谷をぬけて、広大な平原に出る。彼女のへそのくぼみの中で寝ころがって遊ぼう。その先に見えているワクワクするようなジャングルでの冒険に備えて。

ずいぶん毛が濃いよ、と彼は内心思う。

「ペン」と彼女が呼ぶ。「眠っちゃつたの。のろいわね。やるんだつたら早くしてくれない」

「今やつてるところさ」と、彼は嬉しそうに言う。

セーンは危険でいっぱい冒険の夢をみる。彼女の谷間を見つめながら、自分が夢をみているのだと思う。みんながその谷間から一列に並んで出てくる。彼自身もその中にいる。誰もがはだかで、月の光をあびてはしゃいでいる。それは永遠の出入口なのだ。夕方になると一列にまた並んで戻っていく。暁が再び訪ねてくるまで、眠るのだ。

眠る。そうだ、ゆうべは全然寝ていなかったのだ、と彼は急に思いだした。彼は疲れていた。彼女の腹に軽く口づけすると、肩を抱いて彼女のからだをびったり引き寄せる。彼女の温もりを感じて、セーンは幸せな気持ちで眼を閉じる。

「ねえ、ちよつと……」

彼がほんとうに眠りかけていると、彼女が起こした。

「寝るなら寝る、やるならやるで早くしてくれない。時間がないんだから」

「いいよ。もう終りにしよう。ぼくは帰るから」

セーンはものうげに起きあがると、ズボンをとってはき、シャツをとって着た。彼女も服を着てしまふと、セーンに近づいてきて、頬にキスをして言った。

「あきれた。かわいかったらありやしない。はじめてだったんなら……」
彼女はセーンを正面から見つめ、上気したように話した。口もとに笑みを浮かべ、瞳をきらりとさせて。

「やったことあるよ」。彼は急いで答える。けれども一瞬つまつてからまたつぶやいた。

「ん……やったことないんだ。やったことないってことをやったことがあるのさ」

そう言い終るとセーンは、口もとをゆがめている彼女を一人残して部屋を出た。

ワイラード盲目病棟

藤本和子

1 白樺病院の「高砂」

はじめの訪問は久しぶりの日差しに雪のとけた、二月のある日の午後だった。ボランティア係の事務所がある建物の屋根から、どすんどすと雪の塊が落ちて、水溜りがしぶきを上げ、事務所のガラス窓が汚れてしまう。ボランティア係のルース・パーカーがスライドを見せてくれて、ニューヨーク州立ワイラード精神医療センターにおけるボランティアの役割を説明した。そのあと、「ボランティアの

責任と心がまえ」ということを述べた用紙に署名しなさい、といわれた。ボランティアは何をしてはいけない、どのようなことを自覚しておかねばならない、と詳しく書いてあった。それに署名すると、個人的なことを色々たずねられた。

何だか奇妙だった。

私と私の夫は、ワイラード精神医療センターの患者さんの一人、オキヤマ・フタキさんという日本人のお年寄りに会いに行っただけだ、と思っていたので、あれこれきかれ、署名などすることになるのは意外だった。

コーネル大学東アジア学部の掲示板に、日本人の患者さんと日本語で話してくれる人はいないか、という依頼の貼紙があったので、夫と私は行ってみようときめた。記してあった電話番号のところに電話すると、ワイラードのル

ース・パーカーに直接電話しなさいといわれた。パーカーに電話すると、次のような話だった。

オキヤマ・フタキさんという八十二歳の日本人の男性がウイラードにいるが、この患者さんは誰とも口をきかない、そこで病院は、もしかしたら、日本語の話せる人にかけてもらったら、オキヤマさんが反応してくれるかもしれない、何とかいってくれるかもしれないと考えた。

オキヤマさんは、もう六十年も病院に入院したままで、盲目である——。自分の身のまわりのことはできるし、いつも清潔にきちんとしている。でも誰とも口をきかない。

医師や看護婦や患者が話しかけても、けっして反応しない。精神病院の生活六十年。そして盲目。日本人。それだけ聞いて、すでに鉛のような心持ちになっていたが、行ってみると、さらにボランティアの誓約だとかボランティアの役割だとか、考えてもいなかった大げさなことで、まいてしまった。そういうのじゃない、ただ会って、しばらく一緒にすわって、日本語で話でもしてみても、そんなことでオキヤマさんの気持が慰さめられるとしたら、それもいいと思っただけだった。

話を聞いていてしだいにわかったのだが、患者さんを訪ねていって、しばらく話をしたりするボランティアは、「コンパニオンシップ療法」という療法の一部を担う人々であること、医師や看護婦という医療の立場にある人々でなく、

ただふつうの個人が世間話をするように患者さんと会話をすること、患者さんの状態がよくなることもある、ということだった。いちばん大きな目的は、病院のスタッフが与えることのできない個人的な人間的な接触を少しでも作る、ということらしい。

私はボランティアという立場に立って、「コンパニオンシップ療法」の一部を担うというような立派な心がまえで出かけて行ったのではなかった、ややたじろぎ——重苦しい。

おそろしいことになったぞ。

「コンパニオンシップ療法の手伝いをしにきてくれるボランティアの中には、ちっとも効果が上らないので失望してしまう人々がわりと多いのですよ。奇跡が起こらないと落胆してしまう。あなたたち、奇跡を期待してはだめですよ」とパーカーさんはいった。

とりわけ、オキヤマさんの場合、奇跡からはほど遠いケースだと。

パーカーさんと、担当のソシヤル・ワーカーの話を総合すると、オキヤマさんは一八九一年二月生まれであること、一九二三年以来ニューヨーク州の精神病院で暮ってきたこと、盲目になったのは十年前、ウイラードに移ったのは一九六〇年、話しかけても反応を示さない、日本のどこかに親族がいるかどうかたずねることもできない。日本語

を話せる人に話し相手になってもらおうと病院側が考えたのは、もし、少しでも反応があつて、家族や親類のことでもわかれば、そこへ連絡して、日本につれて帰りたいということになれば、きっとオキヤマさんだつてそのほうがいいだろうということからだった。

オキヤマさんはいかなる経過をたどつてニューヨークの精神病院に入ることになったのか。

ソシヤル・ワーカーの話によると、日本から一九二三年に船でニューヨークへやってきたオキヤマさんは、上陸してまもなく、相棒の友人とはぐれてしまった。言葉もわからないし、はじめてのニューヨークで迷ってしまったオキヤマさんは、やがて警察にひろわれ連れて行かれたが、警察で質問されている最中に暴れだし、暴行をはたらいで留置されたのだったが、その後精神病院に収容された、ということだった。

「当時、一九二〇年代というのは、ヨーロッパからもアジアからも移民が多くやってきて、言葉もわからないし、習慣もちがうし、身よりもいないという場合には、寂しさとしョックで精神病のようになるという人々が多かつたようです」とソシヤル・ワーカーは説明した。

「オキヤマさんはどのような診断を受けているのですか?」「分裂症ということになってます。でも、昔は、何でもかんでも分裂症だとしてしまつた。外国から移民してきた人だ

ちでも、ちよつとエキセントリックなところがあると、すぐ病院に入れてしまうというようなことが平気で行われていた時代のようです」

そして、それから六十年——。

ソシヤル・ワーカーも奇跡を期待してはいけな、といつた。彼はオキヤマさんは大した病気でないのに入院させられ、患者としてあつかわれているうちに、すっかり黙りこんでしまつた、と考えているようだった。

「今のような状態になるには、六十年間の病院生活があつた、ということをお忘れはならないのです」

ふとしたことで入院させられた人が、そのまま置き忘れられてしまつた、それでも、まだ間に合うことなら何とかしたい、と彼はいおうとしているようだった。

置き忘れられたようにして六十年。それが本当に真相なのだろうか、と私は思った。

以前にも一人、日本人の患者がいて、やはりその人もいくら話しかけても反応してくれなかつた。ところがある日、医師の一人が、「英語がわからないのかもしれない!」と思いつき、日本語を喋る人を連れてきて話しかけてもらった、何も精神に異常を見出すことができない健康人で、日本にいる家族に連絡したら、早速迎えにきて、喜んで帰つて行つたということがあつたという。その患者さんは十五年ぐらい病院にいらしたらしい。

その日は話を聞き、オキヤマさんには会わせてもらえずに、次の週からの訪問の日程をきめて帰るよういわれた。パーカーさんとソシヤル・ワーカーの説明では、まるで雲を掴むような話で、私たちは「どういうことか、わからない」「わからない」というばかり。摩天楼の影が黒く、歩道を谷間のように染める喧噪の二十年代のニューヨークに、ひとり迷い子になった日本人の青年の様子を想像してみる。西も東もわからないというような常套文句が真実の状況に近かったと思われるような状況。警察にひろわれるまで、オキヤマさんは何日も街を歩きまわり、相棒を探しまわったのだろうか。どこで食事をとり、どこで眠ったのだろうか。警察にひろわれたときは、すっかり浮浪者のように汚れ、疲弊していたのだろうか。それとも、相棒にはぐれたその日に、すでに警察に行ったのか。

言葉はまったくわからなかったのか。それともわかっただのか。もしかまったく英語を喋ることができないとしたら、船を降りて、間もなく相棒とはぐれ、気持がすっかり混乱していた、というような話は、どこから報告されたことなのか。通訳が雇われたのか。

精神病でもなんでもない、ただやや混乱気味の日本人を、ニューヨーク州は六十年間も精神病院に閉じこめた、というような、単純にかつ恐ろしい話なのか。

ンのほとんどが視力のある患者さんたちを対象にしている場合が多かったことから、自然に仲間はずれになってしまふ。そういうことを考え合わせ、それぞれの年令層に要求される条件を満たし、盲目などの障害から生まれるそれらの必要に応えるために、病棟に収容する方法が変化してきたという。

観音開きになる大きなガラスの扉を開けて、看護婦助手が私たちを入れてくれた。入ると、そこはロビーのようになっていて、右に病室に通じる廊下が見え、正面に医務室、左手が大きなレクリエーション室になっていた。

ロビーには、椅子に腰かけた小柄な老人の姿があった。東洋人だったので、それがオキヤマさんかと思った。看護婦助手が「ではオキヤマさんを連れてきますからね」といったので、オキヤマさんではないことがわかった。

オキヤマさんは、小柄で、髪が短かく刈ってあり、格子柄のスポーツシャツと混紡のズボンで、笑っていた。手に触れて、私たちが自己紹介すると、やわらかな笑いがまた顔中に広がった。看護婦助手がそのオキヤマさんと腕を組んでいた。

レクリエーション室には、応接セットの置いてある場所がいくつかあって、そこに三人で坐ると、やさしいおじいさんが孫たちと話しているのか、というような風景になった。

ただ、英語がほとんどわからなかったということが正しいのなら、精神病であつたにしろ、なかったにしろ、病院に収容された生活は、カフカの小説よりおそろしいものだったに違いない。人々の声は、耳にとどく漆黒の闇のごとく、その形状も意味もわからない不条理の波となって押し寄せてくるばかりだ。自分の声は音ではあつても、実質は虚空として送り出され、言葉は死体のように目の前にゴロゴロ転がるばかり。

それが、しばらく、私の白昼夢になったが、そのように想像をめぐらすことが正当だという根拠もなかった。

ただ、完璧な沈黙は、長い年月のうちに、孤独と、想像を絶する失意と、またおそらくは恐怖などと向き合うための最大の妥協として、いつの間にか訪れたものではなかったか。

病棟への最初の訪問。

「白樺病棟」は二階建ての煉瓦造りで、玄関の前に大きな美しい白樺があるので、そう呼ばれている。オキヤマさんの病棟は老人で視力を失った人々が収容されている。以前は老人、盲人というように分けずに、性別と病気の種類などによって分けていた。しかし、老人たちは若い患者たちと一緒に、さまざまな活動にも、とり残されたようになってしまふことが多いし、盲目の人々も、レクリエーション

でも、オキヤマさんは一言も口をきかなかった。

私は、もし、オキヤマさんが日本語を喋ることとも完全に切断されているなら、そして日本語につながる過去とも完全に切断されているなら、たべものが何かの役に立つかもしれないと思ひ、日本茶を魔法瓶に詰め、葛菓子を作つてもって行つた。

オキヤマさんはお茶を呑み、葛菓子を食べてくれた。まづそのような様子ではなかった。

でも、それが六十年前のオキヤマさんの生活につながる扉を叩いてくれはしなかったし、縛られた舌をほどきはしなかった。

話しかけられても、オキヤマさんは表情を変えない。日本語が聞こえてきても、それでふと耳を傾けるような様子も見せない。

じつと黙っている。ただ看護婦助手の「ミスタ・オキヤマ」という声に対しては、「ヤー」というような発音で反応する。「お手洗ひに行きたいのですか」とか「もう食事はすんだのですか」などという質問にも「ヤー」と大声で反応する。看護婦助手は「何をきいても、ヤー」という答なのね」といった。

時々、微笑していた。

一緒に坐つて一時間もたつたころ、オキヤマさんは「さあ」というような感じで椅子から立ち上つた。「もう帰り

なさい」というシグナル、「わたしはもう疲れました。自分の部屋に帰ります」というシグナルだと私たちは思った。病棟を出ると、私たちのうしろに扉が閉じられ、錠がかけられた。階下へ降り、正面玄関から外へ出るともう暗い。また雪になっていた。

二度目の訪問には、私はませずしを用意した。お箸ももった。

お箸を渡すと、ほんのしばらく、それに触ってみていたが、すぐにお箸をもつ正しい持ちかたをした。この手たちが何かを思い出そうとしている、とでもいうように、両手でお箸をもつてみていたのだが、すつと右手にもつた。その瞬間が凍えていた何かを叩いてはくれまいかと願っていたのだが、そんなことは起こらなかった。六十年ぶりのお箸だったはずなのだが、肉体的に記憶していた「お箸をもつ」という動作は、六十年を一息に跳び越えはしたものの、その動作そのもので自己完結してしまっただ。

結局、ませずしはお箸では食べにくいので、スプーンを手渡した。一口、口に運んだと思ったら、すぐにそれを出してしまった。「ごはんなのに、本当にいやなのだろうか」と、もう一口すすめてみたが、また同じことになった。ませずしがだめなら、もうこの先はどうしようと、私は思った。

あとで看護助手にこの話をしたら、「オキヤマさんはね、ごはんは大嫌い。病院の食事でもごはんだけは必ず残すのよ」といった。

どうしたのだろうか？ 日本からきたときから、お米は大嫌いだったのか。それとも、病院の暮しの中で、何かの理由から、とうとう米嫌いになったのか。

ませずしにはそれつきり手をつけぬまま、オキヤマさんは緑茶だけ二杯飲んだ。

お米の食事がだめなら、音楽はどうかしらということになって、私たちはうちにある日本の歌のカセット・テープなどを掘り返した。昨年の夏、親切な知人が送ってくれた「決定版懐メロ演歌大全集」なら何かあるのではないかと思っただが、考えてみると、オキヤマさんが日本を発つたのは大正十一年頃らしいから、私たちのところにある歌は、どれもそれ以降のものばかりでだめだった。しかたない、それより古いもの、とても古いものといえは、観世流の「世阿弥誕生六百年記念」の能楽のレコードだけなのだ。そのレコードからカセット・テープに録音して、病院へもって行った。

「テープ・レコーダーを膝の上に置いてあげなさいね。盲目の患者さんは、からだに伝わる震動を感じながら音楽を聴くことが好きだから」と看護助手がいつてくれた。(私たちの会った看護助手は二人だったが、二人ともオキヤマさん

を心から好んでいるようだった。オキヤマさんはいつも静かで、面倒なことでも全くないし、すばらしい性格の人だから、と彼女たちはいった) オキヤマさんは膝の上のテープ・レコーダーに触れ、その小さな器械の形を調べていた。ニューヨーク州中部ウィラードの「ウィラード精神医療センター」の「白樺病棟」の二階の一室に、「高砂」を謡う声が流れる。

今を始めるの旅衣

今を始めるの旅衣

日も行く末ぞ 久しき

.....

旅衣

末遙ばるの都路を

末遙ばるの都路を

今日思ひ立つ 浦の波

舟路のどけき 春風の

幾日来ぬらん 跡末も

オキヤマさんはじつと聴いているようだった。

表情は変わることはなかったし、声も出さなかった。

看護助手がそつと寄ってきて、「小さな声でこれは日本

のオペラなのね」といった。

笛の音が、小鼓の音が、太鼓の音が、冬の、雪のウィラードの盲目病棟に響き渡る。

所は高砂の

所は高砂の

尾上の松も 年古りて

老いの波も 寄り来るや

木の下蔭の 落ち葉かく

なるまで命 ながらへて

私はふと考えた、ニューヨークで船を降りて、それから間もなく病院生活を始め、そのまま六十年の歳月が過ぎて行った。というのがオキヤマさんのアメリカにおける生活全史だったというのなら、オキヤマさんにとっては、アメリカは病院生活で見てきたアメリカだけである。オキヤマさんにとつてのアメリカ人とは、精神病院で働く医師や看護婦や看護助手や配膳人や掃除係、そして入院している患者たちのことである。

あまりに長いこと病院で暮しているうちに、アメリカという国では、誰も彼も「病院」のようなくところだ、「このように」暮している国だと、思いこむようになったことはなかったかしら、と。

摩天楼の谷間をさまよった数時間、あるいは数日間、あれこそはただの夢ではなかったかと。

オキヤマさんはひっそりと、赤いビニール張りの大きな安楽椅子に、その小さなからだを沈めるようにしていた。時々、額に皺を寄せる。その意味はわからない。

少し離れたところで、もう一人の東洋人らしい患者さんが、「高砂」をじっと聴いているようだった。フィリピン生まれのラグーダさんという男性で、看護助手は「ラグーダさんは音楽が大好きなの。オペラなんか、特に好きで、機会があると熱心に聴いていますよ」とおしえてくれた。

ラグーダさんに、どうぞここへおいでください、というとき、彼はやってきて一緒に坐り、昔、長崎に行ったことがある、そのときは人力車に乗りましたよ、という話になった。ラグーダさんは九十二歳だった。「もう大分見えなくなつてしまいました」とラグーダさんはいったが、影のように物の輪郭はわかるので、彼がオキヤマさんを洗面所に案内することが多いようだった。

そのあとも何度か私たちのオキヤマさん訪問は続いた。でもオキヤマさんは間もなく亡くなられたのだった。私たちが一週間ほどイサカを留守にした週に。ふつうなら訪ねていくことになっていた火曜日の二日前の晩、急に具合が悪くなり、別の病棟に移った。旅から帰ってくると、「こちらから連絡するまでは訪問を中止するように」という手紙

マさんが幻覚や幻聴に襲われているらしい症状を示すと、頬をそっと撫でてあげた。すると、オキヤマさんの発作はやがて鎮まった。鎮まるまで、いつまでも撫でていた。医師は「私らはボンドさんのように、いつも患者と一緒にいるわけではないし、医師が患者の深奥の苦しみを知って、一人一人について、その苦しみを柔げてあげる方法、投薬や治療ということより、人間的な方法で何とかしようとすような態度にとぼしいのに、ボンドさんはその観察力とやさしさで、患者の発作に対処する方法を発見してしまつた。幻覚で苦しもうにしていたら、そっと頬を撫でてあげなさい、と私に教えてくれたんだ。どっちが医者だかわからない、と私がいうと、彼も同意してましたよ」と語つた。オキヤマさんはひとりっきりの、それ以上の孤独はありえないと思うような暗い暗い想像を絶する闇の六十年を過したのだ、と私はずっと確信していた。病院の暮しの中にもつ、モリス・ボンドのような人との交流を想像してもいなかった。

そう、もしかしたら、そこには三十年間にわたる、二人の男の、たとえようもなく特別な絆が存在したのかもしれない。

オキヤマさんは他の患者さんたちからも、大変好かれていた。穏やかで小柄なところが、皆の気持を、オキヤマさん

が病院から届いていた。その翌日、「オキヤマさんは亡くなられた。葬儀の日は未定」という連絡が入った。

旅券から出身地がわかれば、遺族を探しあてることもできるかもしれない、高齢で逝かれたから、ご兄弟などがまだ生存しておられるかどうか、それもおぼつかないが、六十年前にアメリカに渡ったときり消息がわからなくなった伯父さんがいたのだよ、という話を聞いて育った甥や姪がいて、遺骨なりを引き取りたいということにだつてなるかもしれない、とさまざまな思いをめぐらし、私たちは病院でもう少し詳しい話を聞きたいと申し入れた。

オキヤマさんのケース・ワーカーだった男性に紹介され、行つて見ると、最後の数年オキヤマさんの担当医だった精神医も同席してくれて、わかることは話そう、ということだった。しかしこの医師がワイラー病院に移ってきたときには、オキヤマさんの沈黙はもう誰にも破ることのできない、測り知れぬ奥行きのもものなつていた。言葉でオキヤマさんの魂に触れることは誰にもできないことだつたらしい。

けれども、つい最近停年でやめた看護夫のモリス・ボンドという人物などは三十年間にわたつて、オキヤマさんの面倒をみたのだったが、その彼は言葉以外の手段で意思を通い合せていたという。ボンドは、たとえば、オキヤ

んを何となく保護してあげたい、守ってあげたいという方向に動かしたのですね、と医師はつけ加えた。

「日本の出身地を知る方法はないのですか」と私はケース・ワーカーにたずねた。ケース・ワーカーはオキヤマさんのファイルの第一ページを私の前に置いた。そう長いことこのファイルを見せてくれるわけではない、と思つて、私は少しメモを取りながら、そのページの下の部分にある会話の記録を大急ぎで読み、頭の記録板に書きつけた。

ファイルの第一ページとは、オキヤマさんが初めて入院した、その日に書き込まれた記録であるはずだった。右下に六十年前の、オキヤマさんがおだやかに笑つている写真が貼りつけてある。「ああ、やっぱりオキヤマさんだ」と夫がいった。たしかに彼だった。

入院手続きのページは次のように始まつていた――

フタキ・オキヤマ(患者番号三七七八七)

(ユタカ・アキヤマ)

一八九一年二月二十五日生まれ。

フクオカケン アサクラゲン アマギマチ

トウキョウウキセン「サヌキ丸」にてニューヨーク上陸。

出船は一九一七年十二月二十六日。彼は船員であった。

本病院入院は一九一八年四月二十二日

括弧の中のユタカ・オキヤマというのはどういうことだろうか。オキヤマさんはその時、自分はユタカ・アキヤマという人物だと思われていて、入院当時医師にそう告げられたので、それが括弧に入れられて記録されたのか。

さて、この記録によると、オキヤマさんはニューヨーク上陸後およそ四カ月してから入院したことになっている。そればかりではない。

右の記録に続いて、入院の続きをした病院側の人物とオキヤマさんの面接の様子が記録されていた。第一ページの内容を記憶しているかぎりでは――

あなたはアメリカにきてからどこに住んでいましたか。ニューヨーク州ロングアイランドで、ピーターソンという家で、庭師をしていました。

で、そこで働いていて具合が悪くなったのですか。

そうです。色々なことが、とても困難になってきたのです。

色々なこととは、たとえばどういうことですか？

人間関係とか……。

そして、やがて、頭の中に声が聞こえたりするようになったのですか。

そうです。

誰の声だかわかりましたか。

勝手にでっち上げた話ではあるまいし、ただの噂を、また聞きの噂話をしていただけではあるまい。

オキヤマさんの医師を相手の身の上話には、もしかしたら種類かの説明が存在したのかもしれない。

しかしオキヤマさんは、それでは英語を喋れたのだろうか。私には、どうもそうではなかったような気がしてならない。なぜそう思うのかと聞かれても証拠を上げて答えることはできないのだが。

入院当時の担当医師たちは、もうすでにこの世にはいないだろう。身のまわりの世話をした人たちも亡くなったり、停年でやめたりして去って行った。六十年のオキヤマさんの入院生活の間に、さまざまな代替りがあった。精神医療の治療方法も、精神障害に対する思想や概念も、いくつもの変化を経ってきた。

オキヤマさんはそれらすべての変遷を生きのびてきた。

「オキヤマさんは本当に病んでおられたのでしょうか」と私たちはたずねた。もし口をきけないのなら、どうしてわかりますか？ という意味も含めて。幻覚や幻聴があることは観察でわかったということだった。時ならぬ高笑い、心の中で起こるなにかにおびえ苦しむ様子、その他の症状が見られた。

「すると、オキヤマさんはやはり病気があったと？」と私は重ねてたずねた。

天皇の声が聞こえることができました。

これで一ページ目は終わっていた。そして、ファイルは取り上げられた。

どういうことだったのか、いったい？

これは本当にオキヤマさんが喋ったのか。それとも通訳がいたのか。庭師をしていたという家の人が付き添ってきたくれて入院したのか。

初めての病院の所在地はビンガムトンというニューヨーク州中部の小都市である。私はオキヤマさんはニューヨーク市内のベルヴェーユ病院あたりに一九六〇年までいたと勝手に思い込んでいた。ビンガムトンはウイラードから車で一時間半ぐらい、百五十キロぐらいのところである。

それに、もしこの面接記録が正しいのなら、以前に書いた「下船して相棒とはぐれて、気が転倒して警察で暴れて、やがて病院に収容された」という話は、一体どこから湧いてきたものだろう。その話は病棟のソシヤル・ワーカーから伝えられたものだったが、彼は六十年前の入院手続きの記録の入ったファイルではなく、もっと最近のものしか見えないかったのだろう。

ずっと後の記録には、オキヤマさんが、下船して、すぐ相棒とはぐれてしまつて、警察に行つて、それからという話をした記録があるかもしれない。ソシヤル・ワーカーが

「精神安定剤がこの世に登場した一九五五年から精神医療は大きな変化を迎えました。精神安定剤が使えるようになって、患者の入院期間はきわめて短かくなって、病院生活は一生の幽閉の牢獲のようなものではなくなり、いわば患者さんたちの社会復帰を目標にする場所に変つたといえるのです。回復しかけ、患者にも自信がついたら、病院のある地域の一般家庭に住まわせてもらい、必要がある時だけ通院して、社会復帰の準備をしたり、あるいは朝病院から職場に出かけて一日働き、夜はふたたび病院に戻つて眠る、という方法もある。ともかく病院に閉じこもる時間をできるだけ短くする、というふうの方針が転換して行つたわけです。

現在、新たに入院してきた患者さんなら、どれほど長くいたとしても二年。平均の入院期間はそれよりずっと短かくなつてます。

だから、オキヤマさんのようにたしかに障害があつても、日常の行動もきわめて穏やかで、身のまわりのこともきちつとできるかなら、病院を出て、どこかの家庭の一員として住み、そして仕事を見つけるといふことも可能だったはずです。はずです、ということは、精神医学に大転換の起こりはじめた時期が五十年代でなく、もっと昔だったら、ということですよ。

変化の起こりはじめた五十年代には、まず盲目という障

害がありましたし、すでにオキヤマさんの病院生活は三十年以上も続いており、病院という施設の暮しにすっかり馴れてしまっていた彼を、突然どこかの家庭に移すようなことはかえって残酷で、できませんでした。太平洋戦争のこともありましたから、ウイラードのような田舎で、日本人であるオキヤマさんを、地域共同社会に放り込むのはあまり感心できることではないという判断もあったはずです。ですから、オキヤマさんの場合、保護するということは病院収容を継続するということだったわけですよ。と医師は話した。

一九七四年、病院はニューヨークの日本総領事館宛に手紙を出した。オキヤマさんのことについてわかることがあつたら知らせてほしい、親族なり親戚なりがわかれば、日本に送還してあげたほうが、本人のためには仕合せではないかと考えるという主旨の文面だった。手紙の写しをケーサーカーが見せてくれたのだった。日本領事館から返事はきたのか、きたとしたら、どのような内容のものだったか。日本領事館は本国に問い合わせ、本国はできるかぎりのことをして調べたのか。

翻つて、そもそもウイラード病院が、日本語で話相手になってくれる人はいないか、そしたら、なにかオキヤマさん自身について手がかりがつかめるかもしれない、ちょっとしたヒントでも、つかめるかもしれない、という主旨で

小高い丘が病院の墓地になっていて、丘からはセネカ湖が見下せる。ここはもとは南北戦争で斃れた兵士たちの墓で、現在でもそれが残っている。

北軍の兵士たちの骸と、ウイラード病院でこの世を去って行った人々の骸がその丘に葬られていた。

昔からの習慣で、精神病院で亡くなり、精神病院の墓地に埋葬された死者たちの墓標には名前が刻まれていない。精神病院で亡くなった人を親族としてもつ人々を中傷から保護する、ということから始まった習慣らしい。

オキヤマさんの墓標にも名前はない。あるのは番号だけである。

墓標は大理石などではない。灰色のブロック一個である。他の死者たちも同様に。

北のイサカにも春が近づいていた。夢かと思うような、ライラックの季節が近づいていた。でも、それを待たず、オキヤマさんはある晩心臓麻痺を起こし、間もなく息を引きとったのだった。

丘の墓地に立っても、私には亡くなったオキヤマさんに語りかける言葉はなかった。生きておられた間の、短い邂逅の期間にも、私から語りかけうる言葉はあまりなかった。私の無力は徹底的なものだった。

なにもかも、あまりにも長い時間が続いて、なにもかもがもう遅すぎた。

コーネル大学に依頼したことを思い起こすと、病院は領事館からは一切手がかりになるような情報をもたらしてはいないと結論できそうである。

視力が失われた時期は一九六九年頃ということになっている。一九六九年一月三十一日に正式に盲人と認定された。しかし正式に認定される、ということは、病院が国からオキヤマさんを対象として受ける援助が増えるということだから、病院はそう認定してもらったのだと思うと、医師はのべた。視力の失われた原因をたずねると、白内障ではなかっただろう、おそらく急激にやってきた緑内障ではなかったか、目に起こっている変化について訴えずにいる間に、手術が手遅れになってしまったのではないかと思うということだった。正式に盲人と認定された後も、かなり長いこと、眼鏡をかければ見えたということ。すっかり見えなくなってしまったのは、亡くなる前の二年間だけだった。視力がゼロになっても、オキヤマさんの行動に変化は起こらなかった。

八十八歳でオキヤマさんは逝った。長い長い、異国の病院暮らしだった。病院生活そのものが六十五年間の個人史となつてしまった。

医師とケーサーカーから聞き出せるだけ聞いて、そのあとお墓にお参りしたいと申し出ると、案内してくれた。夕暮れが迫っていた。

2 かげりもない、パネイの夜ふけに

ウイラード精神医療センターのオキヤマさんを訪ねたのがきっかけになって、わずかな時間を一緒に過した、もう一人の男性のことを書こう。

その人はフィリピン出身の、九十三歳のロド・ラグーダさんだった。ラグーダさんと言葉を交す契機になったのは、私たちがオキヤマさんの膝の上にテープレコーダーをのせて、一緒に「高砂」を聞いたことだった。三メートルほど離れてテレビを観ていたラグーダさんは、首を少し捻るようにして、じつとこちらの「高砂」を聞き取ろうとしていた。看護助手が「ラグーダさんは音楽が心から好きなのね」といったので、「こちらにおいてになったら」と誘ってみたのだった。

「日本の音楽だな」とラグーダさん。

「日本にはね、行ったことがあるんですよ。フィリピンからアメリカへ来る途中に寄ったんですよ。遠い、遠い昔のことだけど。長崎に行つて。そう、坂を人力車に乗って登

って行ったのです。海が見えて。美しいところだった」と。
ラグーダさんはきちんとした英語で礼儀正しく話す。とても遠慮して、お茶をすすめても、「いや、私は結構」と
けって飲もうとしない。

視力は大分衰えてしまったが、それでもまだテレビの映像はぼんやり見えるので、毎晩ニュースを観ている。その日のニュースはエジプトのサダト大統領がパレスチナ難民のことで発言した、と伝えていたが、ラグーダさんは「パレスチナ難民が国を建てたいということは適切なことかどか、私は考えようとしているところですよ」といった。

病院にきて、患者さんの病いのことや、生い立ちについて、こちらからあれこれ話さねばならない。ラグーダさんはそのすばらしい記憶力に手を引かれ、間わず語りに、色々話してくれる。

「私はね、フィリピンのパネイ島で生まれて、カトリック教徒として育てられたのだけど、ある時、アメリカからやって来たメソヂイストの宣教師に、メソヂイストに回宗しないかといわれたんですよ。私は回宗してもいいなと思つたので、回宗してもいいけど、そのかわり、アメリカへ連れて行って教育を受けられるようにしてくれないかと条件を出したら、いいとも、というんです。それがきっかけでアメリカへ渡って来たわけ。

高等学校はついに卒業できず、ということになりました。

に向いはじめた時には、すでにラグーダさんも病院生活が長すぎて、外に出たときにつきつけられる適応への要求は荷が重すぎたことだろう。オキヤマさんもラグーダさんも、古い精神医療思想の時代の終りの外へ生き延び、病院に身を置いたままその一生を閉じることになった。家族もなく、家庭の食卓の食事を口にすることもなかった長い長い時間。めいめいのお盆に、湯気の立つようにホカホカと熱くもないし、冷めきつているのでもない、いつも生あたたかな食事が運ばれてくる生活を幾十年。病院の朝、病院の昼、病院の夜。宇宙となった病院。

ラグーダさんが保っていた心の平穏と澄明は無惨な孤独の中でさえ、その柔らかさを、高潔さを失うことはなかったのだ、と私は感じた。

「歌を作ったこともありませんよ。歌ってあげましょうか」とラグーダさんはいった。

「歌ってください」と私たちは頼んだ。

「パネイ島のことを思い出しながら作った歌です。パネイは美しい島でした。工業化されていなくなったから、貧しかつたけれど、美しい島でした。技術を取り入れることが必要な土地でした。いまはどうなっているのでしょうか。近代化されたのでしょうか。」

歌には曲もつけました。

歌いますよ。

が、でもアメリカで教育を受けるということをやってはみただのです。その頃はユタ州に住んでました。
その後バツファローで、そう、あそこでフィリピン出身の人々のクラブに入って、いろいろ冒険的なことをしたけど……。その頃具合が悪くなってしまって、一年間入院して、冒険の日々はそれでおしまいになったわけ」

それ以来、精神病院に出たり入ったりする生活が続いたらしい。ウイラードへきて何年になるのか、わからない。現在の入院生活が何年になるのか、それもわからない。十代の頃、たった一人でパネイ島からアメリカへ渡り、アメリカにはおそろしく身寄りはいない。

「伯父に金持がいて、以前には送金してくれたりしたんですよ。でもずっとそれも途断えてしまつてどうしたんでしようね。死んでしまったのでしようね」

それから宗教哲学の話になり、ラグーダさんはトマス・アクイナスや聖アウグスティンについての意見を述べた。カントの言葉についても感想を述べた。「視力があつた時は、読書をすいぶんしましたのにも」。

ラグーダさんの場合も障害の程度からいえば十分に通院ですむケースだろう。けれども、医療の思想が変革され、患者に対してはできるだけ入院生活を少なくし、普通の日常生活への一日も早い社会復帰を目標にして治療する方向

かすかに はるかから

流れてくるのは おまえの声

風 風にのって

降る星の夜に かげりもなく

たださらさらと 鳴る木々の葉

おお夜に パネルの夜ふけに

ここまで歌って、彼は咳払いして、どうもうまく歌えない、といった。「今晚は私の祖母が私の声をコントロールしているのです」と。私たちには見えない姿や、聞こえない声や、感じることでできない気配があるようだった。それは影を落とすばかりだったのか。それともそれらは彼の世界を時空を超えて広げ、彼のびやかに飛翔していたのかもしれない。

「パネルにはね」と、しばらく沈黙していたラグーダさんが再び口を開いた。「パネイには中国人の商人たちが住んでいました。商売熱心でよく働く連中でした。ところが突如、この人たちがいなくなつた。どこへ行つてしまったのだろうか、と皆はあれこれ取り沙汰してました。私の推測では、あの男たちの一人は東郷元師だったんですよ。天皇の命を受けて、時機が到来したので、日本へ帰つたのにちがいません」

ラグーダさんはオキヤマさんのことについて「推測」していることがあって、オキヤマさんには娘が一人いて、娘がオキヤマさんを迎えにくるだろうといった。そうだったら、どんなにかよかったことだろうに。オキヤマさんが喋らないのは言葉をすっかり忘れてしまったからだ、ともいった。「なにしろ年寄りだからね」と五歳年下のオキヤマさんのことを、そういった。

ラグーダさんの好きなものは音楽と葉巻煙草だった。病院では煙草の好きな人たちには食後などに看護助手が火をつけてまわる。ラグーダさんの胸のポケットには、いつも葉巻が入っていて、「火をつけてあげようか」と問われると、「あつ、お願いしますよ」といつも嬉しそうになった。

オキヤマさんが亡くなる前の私たちの最後の訪問では、ラグーダさんを含めた四人で、レクリエーション室の一隅に円くなって坐って話をした。オキヤマさんはやはり何もいわなかったが、時折声を上げて笑っていた。やさしい、やさしい表情で。ふと、私はオキヤマさんの軽く開けられた口の中で舌が動いているのを見た、と思った。そおつと顔を近づけて、目を凝らして、私はその舌の動きをとらえようとした。何かいっているのかもしれない、と思ったのだ。舌がかすかにかすかに動き続けた。歯ざしりするよくな思いで、私はそれを読み取ろうとした。わからなかった。

わたしは夫とともに、走るとガタガタいうトヨタ・カローラを運転して、ハイウェイ九六号線を北上したが、晩饗会のあるはずのウォーターリーの「ホリデイ・イン」にはなかなか到着しなかった。いなかの道を、夕焼けを左手に眺めつつ走る。沿道の人々の生活は野菜栽培の農業と、ほんの少しばかりの酪農である。あちこちにサイロが立っている。途中の小さな町々の目貫き通りには、このたびは人々の姿があり、車道で子供たちがスケートボードで遊んでいるたりする。これらの町々には、やはり人々がちゃんと住んでいたのだなとほっとする。一月の雪の日の、オキヤマさんへの最初の訪問の日は、死んでしまったような枯野をすぎでこれらの小さな町々に入ると、人の姿などまったく見えなくて、これこそ噂に聞くゴーストタウンかと考えてしまふほどだったのだ。

あれこれ冬のことを思い出しているうちに、やがてウォーターリーの町が現われ、ついで「ホリデイ・イン」も現われ、晚餐の催される宴会場に入っていくと、受付の婦人が、どこに坐ってもよろしい、といった。わたしは夫はキヨロキヨロと、わたしたちと同年輩の人々がかたまつてそんなテーブルをみて探したが、そのようなテーブルはないのだった。皆さんだいたい六十歳以上で、女性が多い。そして、肥満の女性が多い。ちよつと奥のほうに、四つぐらい

お二人の就寝の時間が近づいていた。レクリエーション室のあちらこちらで、すでに眠り込んでしまった人や、まぼろしの相手と会話を続ける人たちの一人一人の手を取り肩に手をかけて、看護助手が寢室へ連れて行く。ピアノの前にじつと坐っていた女性も、私たちをつかまえては「あたしはね、もうほんとうにすっかりよくなったの。もう病気は治ったの。だから家へ帰る。帰ってやるから」といった五十がらみの女性も、ベッドのある部屋へ戻って行った。オキヤマさんとの最後の別れになるとも知らずに、私たちは病室を出た。玄関を出ると、私たちの背後で錠が下ろされ、闇夜の白樺たちが風にサワサワと鳴った。おやすみなさい、オキヤマさん。おやすみなさい、ラグーダさん。さようなら、さようなら。

ボランティアたちの晩餐会

「ワイラード精神病院」のオキヤマさんのことで、ときどきボランティアとして病院へ行ったので、五月には恒例の「ボランティア晩餐会」に招ばれた。

席があいているテーブルがあつたので、そこに坐ることにした。坐って自己紹介をすると、すでにそこに坐っていた四人もそれぞれ名前を告げたが、わたしは全然おぼえられなかった。そして、しばらくもじもじしてみたが、そんなことしてもしょうがないので、世間話などはじめたのである。食事はまだ運ばれてこないし、有志の演説やあいさつも、功労のあつたボランティアの表彰も食事のあとになると、プログラムに書いてある。プログラムの表紙には「ボランティアこそ、われらが灯」とあって、蠟燭の挿絵まで描いてある。内容を見ると、ニューヨーク州議会の議員がまず最初に演説する、と書いてある。これはあまりよい予感を与えない。

さて、わたしの向いの左端の女性は、その「ホリデイ・イン」の食堂で三年間も働いた、と話した。このホテルのことなら、どこがどうなってるかわかるから、目をつぶって歩けるんだ、と話した。客室のことも、よくわかっていると。客室という客室、残らずルーム・サービスを運んで行ったから。「この食事はだいたいおいしいほうですか、まずいほうですか」とたずねると、「まあ、いいほうね」といってから、ちよつと黙って考えるようにして、それから、「とても、おいしいわよ」とつけ加えた。「ホリデイ・イン」というチェーンのホテルのそもそもの起源

とその思想などについて、わたしはしばらくぼんやり考えていると、やにわにその三年間ここでウエイトレスをしていたこの女性が、「ねえ、あなたたち、ビファローって知ってる？」とたずねた。ビファローなんて知らないから、知りませんと答えると、「ビファローを知らないなんて」と笑って、「ビファローはビーフとバファローのあいのこよ」という。牛と水牛の交合種だというのだ。

「まあ、で、そのビファローはビーフに見えますか、バファローに見えますか？」

「そうね、両方に似てるわね。体はビーフに近いけど、頭がどちらかというとバファローに近くて、毛がモジヤモジヤとなっているの。ビファローの利点は飼料がずっと安くすむこと。肉牛だと飼料費が膨大に高くて、それが牛肉の価格を上げる原因の一つになっている。バファローはもともと粗食でいいから、それと牛とかけ合わせれば、バファローと牛の中間的な飼料ですむのね」

「バファロー・バーガーというものを北ダコタ州で食べたことがありますが、肉はボサボサとかたいように思いましたが、ビファローの場合は？」

「バファローには独特の野獸的なにおいがあるけれど、ビファローになると、それがだいぶ減るのよ。肉の口あたりは、やはり中間的なものになって、そう、たしかに牛肉よりやや固いわね。」

つらさにこの四年間、ついに売らずにきてしまった、もうそんなに大きな冷蔵庫なんか全然不要になったというのにね、と、いつか軽くため息をついた。

二扉式大型冷蔵庫だけど四百ドルで売ればいいと思っ
ている、と、いつか、だれだれさんの意見もたずねたけど、
四百ドルなら高くないといわれた、と保証した。なにしろ
新品同様だし。こんどはこの姪とエンデイクットへ引越
すことになったのだから、なんとしてみいよいよ手放さな
ければならない。使いたくない大型冷蔵庫をもって、百マ
イルもの遠方に引越すことはできない。買ってくれそうな
人、心あたりはないかしら。

土地の新聞に広告を出してみたら、ラジオで放送しても
らったら、とわたしは意見を述べた。なにしろ新品同
様の二扉式だから、売りにくいことにはならない、とこの
婦人は結論的にいった。

すると、わたしの隣の席に坐っていた四十歳ぐらいの男
性が、またしても突然、「ああ、早く食事してくれな
きゃ、おれは遅れてしまう」と大声でいった。いったい何に
遅れてしまうのか、と当然のことながら、それぞれが質問
すると、「ロチェスターへ行くことになってるんだ」とい
う。

「ロチェスターの『ホリデイ・イン』に行くことになって
いるのさ」となぜかとても誇らしげに、しかも謎めかして

とそこへ、パンを運んできた若いウエイトレスが、「あ
たしの家ではビファローを十五頭飼ってる」といった。

「ビファローは、でも、見かけが、なんだかせつないバフ
アローみたいでおかしいわね」と元ウエイトレスがいうと、
若いウエイトレスは即座に「そんなことウソよ。とてもか
わいいわよ。美男子たちよ」とやり返した。

「写真もっていないの？」とわたしがたずねたら、「きよ
うはもってないけど、こんどきたら見せたげる。イサカへ
帰る途中、家に寄ってくれたら見せたげる。四一四号線の
ラフイエット。道沿いだから、すぐわかる。寄ってちょう
だいよ」

それからまた少しビファローの話をしたのだが、それも
タネがややつきかけたと思われたころ、元ウエイトレスの
隣にいた老婦人が突然、「あたしは二扉式大型冷蔵庫を売
りたい」といった。

よくきいてみると、彼女は四年前に夫に先立たれ、その
とき家は売ってしまったのだが、この二扉式大型冷蔵庫
だけは売るにしのびず、甥や姪（というのが、隣に坐っ
ている元ウエイトレス）のところに居候する暮しになっ
ても、まだこの二扉式大型冷蔵庫を持ち歩いている、と。そ
れというの、いとしい夫が死ぬつい直前に、その豪華な
冷蔵庫を買ってくれたからだ。夫は三月にその新しい冷蔵
庫を買ってくれて、「六月には死んでしまった」。あまりの

いう。「まあ、『ホリデイ・イン』から『ホリデイ・イン』
を訪ね歩いておられるわけですか」とたずねると、「そう、
その通り。『ホリデイ・イン』はとてもいい、どこへ行っ
ても、着く前から、どんなところに着くのか、すっかり予
想がつくっていくのがすばらしい」と、まじめな顔でいう。
そして、ポケットから『全国』の『ホリデイ・イン』という案内
書を取り出して、「ほらな」ととても自慢らしく見せびら
かすみたいにする。

ぶしつけなとは思ったのだが、他にいうことも思いつか
ないので、「ロチェスターでは何があるのですか」ときい
てみた。彼は答えようとはせず、ただニヤニヤ笑っている。
「そんなにあちこちの、全国の『ホリデイ・イン』に行か
れるのだから、あなたはもしかしたら旅するセールスマン
ではありませんか」とさぐりを入れてみる。それでもただ
ニヤニヤ笑っている。（あとでわかったが、この人物は「全
国鉄鋼労働者組合」の専従で、どうもその関係で旅ばかり
しているらしいのだ。自分では「組合の者だ」とはいわな
かった。組合が「ウイラード精神病院」に何かを寄附した
ので、それで組合を代表して表彰状を受け取りにきたのだ）
ニヤニヤ笑いながら、「ところで、あなたたちは何号線
でイサカから運転してきたのか」ときく。「九六号線」と答
えると、「帰りは八九号線にしな。もつとも、八九号線は
鹿が多いのが難点だな。まっ暗で、鹿が道を渡っているの

が全然見えない。よく車にぶつかって来るよ」という。

「車にぶつかると、鹿は即死してしまうのでしよう。五五マイルで走っている車ですもの」

「うん、だいたい即死だね。車は大破する。おれはすでに二度も、鹿にぶつかられた車をレッカー車で移動してもらった。でも、死なないこともある。あるときは、鹿に怪我をさせただけだった。おれはいつもピストルをこの身におびているから、その場で射殺したよ」

「ピストル？ なぜまたピストルなどをいつも持ち歩くのです？」

「おれはあちこち旅をすることが多い。オツカナイ都会へも行く。どんな目に会うかわからん。ピストルを持っていれば、心が安らかだ」

「へえー」

「おれは香港に行ったことがある」（といって、わたしはどう反応するか待っている。「あたしは中国人よ」というかと思つて）

「おれは朝鮮に行ったことがある」（といってふたたびわたしは反応するのを待っている）

「おれは日本にも行ったことがある」（ととどめをさすようにいって、また反応を待っている）

わたしは全然反応しない。もつというろろなく、にの名をあげてみな、と思つてる。ベトナムとか、タイとか、知っ

てるかぎりいってみな。

「アジアではピストルは持って歩かなかつたでしょう？ 必要ないものね」

「いや、持っていたとも。ピストルがあると心が休まる」

「気持ちわるいわ。わたしはいやだわ」

「いや、心が休まるんだ」

「ピストル持って、『ホリデイ・イン』に泊つて、わりと味気ない生活ね」

「そんなことはない。おれはいつもとても忙しい」といって、アロハシャツの衿元などを正している。

そのころにはすでに、夕食もおおかたすみ、デザートが運ばれてきた。澱粉がどっさり入ったプディング。

「三つぐらい置いてつてくれ」とわたしの正面の初老の男性がいう。「こちらは、ウォータールーの町長さん」と、さつき例の二扉式大型冷蔵庫を売りたい婦人が説明してくれた人物だ。町長さんはデザートのプディングを三つも食べたいのだ。

「このあたりでは、町長さんになると、どんな気持ですか」とたずねると、「わたしは町長だと一応思われてはいる、というだけのこと。わし自身はとても実際の男よ」といった。そして、「下品なことはいいたくないけどさ、ピーナッツバターって、強精剤だつていわれているね」という。「下品なことはいいたくないけどね。ピーナッツバターが強精

剤なら、わしほどセクシーな男はおるまいってわけよ。わしはじつにピーナッツバターが好きで、ピーナッツバターばかり食べている。ピーナッツバターがないと生きていられない。下品なことはいいたくないけど、ピーナッツバターがほんとに強精剤なら、これとても便利な話じゃないの」

そして、ふと表情をくもらせた。

「ピーナッツバターでも、中にマシマロが混ぜてあるやつね、あれが一番好きさ。でも、どうしたんだろ、このごろ、マシマロの混ざつたピーナッツバターがマーケットから姿を消した。どうしたわけだろうねえ。あれが一番好きなのに」

「イサカのマーケットで見つけたら一瓶送ってあげますよ」「そう、そうしてくれる？ 下品なことはいいたくないけど、強精剤にもなるっていうんだものね」

イサカでマシマロ入りのピーナッツバターが見つかったら、宛名は「ニューヨーク州ウォータールー町、町長殿」と書いて送ればいいのだな、とわたしは思ったから住所はきかなかった。

「下品なことはいいたくないけど、ほんとにマシマロ入りのあれ、どこへ消えちまったのかなあ」

やがて汚れたお皿も半分ほど下げられ、三杯目の薄いコーヒーをガブガブと呑み終るころ、マイククロフォンが通電

されて、「キーン」「ブーン」といって、病院の「レクリエーション治療士主任」という人が台に登り、「だいたい食事も終つたことですから、いよいよ本日のプログラムを始めたと思います」といった。

話をする最初の人は、やはりプログラムにある通り、州議会の議員だ。司会の主任氏は紹介のためにといって、この議員がどのようなすばらしい功績のある政治家であるか話したい、といった。「なにしろ、最高にすばらしい人物で、これまでの業績についても、どこから話してよいかわからない、それほどすばらしい。われらが選挙民を代表して、じつに目ざましく活躍している。きょうもきょうとて、忙しい中をわざわざこの晩餐会に出席してくれて、とてもありがたい」とそんなことばかりいって、ついに、どのような内容の偉い人かわからなかつた。議員は演壇に立つと、概略次のようなことを喋つた。

「皆さん、こんばんは。『ワイラー・ド精神病院』職員の皆さん。賓客の皆さん、ボランティアの皆さん、その他の皆さん、こんばんは。わたしはこのような輝かしい機会に、こうしてご挨拶することができてとても幸福です。」

わたしは××郡、××郡、××郡、そして××郡、ニューヨーク州第五二区の選挙民を代表して日夜働いている者ですが、皆さんの支持に対する感謝の気持をかたときたりとも忘れたことはありません。

わたしはこうして本日、ニューヨーク州の首都オルバニ
ーから、州議会を代表し、皆さんにご挨拶しております。
と申しますのも、精神衛生の分野におけるボランティアの
役割の重要さを、誰もが真剣に認めているからであります。
ボランティアのべ人数は、ニューヨーク州におきまして
は、昨年度が七万五千人といわれております。これは膨大
な人数です。じつにボランティア精神衛生行政の重要な部
分を担っているのであります。

ボランティアの活躍なしには、人間的な治療は難しいの
です。

ボランティアは患者の皆さんの人生を明るく照らしてお
ります。

ボランティアは希望の灯です。

ボランティアは……。

さて、御承知のように、州の予算から、大幅に精神衛生
関係の経費が削減されてしまいました。これは不幸なこ
とです。わたしはそのようなことになってはならぬと頑張
りましたが、結果はかんばしくないものになりました。し
かし、『ワイラード精神病院』に関していいますならば、
大幅に改善された予算を与えられることになりましたので、
その点については喜んでよいものと考えております。私の
努力もむだではなかったと喜んでおります。皆さんを代表
するわたしとしては、喜んでおります。

トレスの女性や、その伯母にあたる大型冷蔵庫の老婦人な
どの場合、もつとひっそりと地味なボランティアで、家
にいてせつせと編物をする。患者さんたちのために、肩掛
けや膝掛けを編む。いくつもいくつも編む。それが患者さ
んたちのクリスマスプレゼントになる。

「ワイラード精神病院」の場合は、とりわけ地元民の理解
と協力がめざましいという。だからこの地域では「ホーム
・ケア」といって、それを希望する家族が回復しかけた患
者をあずかって、一緒に生活して、社会復帰の衝撃を少し
でも少なくするという一種の緩衝的治療もかなり成功して
いる。できるだけ病院に閉じこめておく期間を短縮するこ
と。閉じこめられた病院の日常が病気を悪化させるという
悪循環をどこかで、早いうちに断つこと。具合が悪い、と
患者が感じたら、外来患者として訪ねてくればよい、とい
う生活に早くもどすこと。ニューヨーク州には三一の精神
病院センターがあるが、地域住民の協力が必ずしも「ワイ
ラード」のようにうまく行くとは限らないらしい。それで
もなお、姿勢としては地域の日常生活の中で治療しようと
いう傾向を促進しようとしている。

その夜は、帰路、運転していて目茶苦茶に道をまちがえ
た。カユガ湖沿いの道を走って帰るべきところを、セネカ湖
の道へ行ってしまった。「この先一マイル、鹿が横断しま

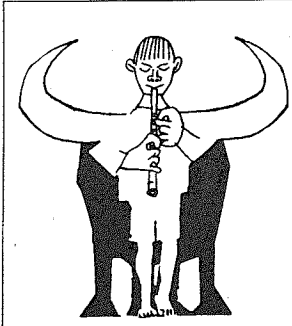
皆さん。『ワイラード精神病院』職員の皆さん。賓客の
皆さん。ボランティアの皆さん、その他の皆さん。今後も
これまで同様、頑張ってください。皆さんの選挙区から出
ているわたしも頑張ります。これからも、どうかよろしく
ご支援のほど、お願いします。以上

いろいろな人がこのようにして演説したり挨拶したり、
「ボランティアは患者の灯」と何度か繰り返されて、よ
うやくとりわけ功労のあった何人かのボランティアが表彰
された。皆さん婦人ばかりだった。表彰は晴れ晴れしたも
のの見え、皆正装していた。ロドリゲス夫人というひとは
薔薇色のひらひらしたイブニングドレスで、「あら、ネグ
リジェかしら」とうっかりいってしまったら、夫に「そう
いうことはもうもんじゃないのだ」とおこられた。表彰さ
れた婦人たちは、皆おそろいの造花の白い大きなコルサー
ジュをつけていて、胸がとても盛り上って見えた。大柄の
堂々たる中年婦人たちがだった。こういう人々はおおかた「コ
ミュニティ活動センター」の運営に積極的に参加し、バリ
バリと他の婦人連中をオルグし狩り出し、お菓子屋にはお
菓子を寄附せよと迫り、食品会社には食品を寄附せよと迫
り、養鶏場には鶏肉や鶏卵を寄附せよと迫って、いつだっ
て寄附させるのに成功してしまうという類のボランティア
たちなのである。

ところで、わたしたちのテーブルに坐っていた元ウエイ

すので注意」という標識が無数にあった。ヘッドライトに
照らし出される標識の「鹿」という文字を見るたびに、「ピ
ストルを持っていけば心が休まる」といった組合専従員の
ことを思い出した。セネカ湖沿いの道は起伏がはげしく、
しかもとても暗い夜で、道が目の前で突然消えてしまうよ
うな錯覚に襲われ、たびたびブレーキを踏んでしまった。
家についたら、隣の家では学生たちを招いてパーティをや
っていたので、そこに混ざりこんで午前三時まで呑んでい
た。わたしはポップコーンを食べすぎて胃がブツとふく
れ、翌朝もまだふくれていた。





水牛楽団のページ

五月三十一日、松戸市民会館の会議室でひらかれた崔哲教さんを支援する松戸市民の会の集会によばれて演奏した。

七十四年四月にK C I Aによってスパイとしてデッチ上げられ逮捕されたから、もうまる九年にもなる。奥さんの孫順伊さんは、来年もまたこのような形で十周年の集会をやるのはいやだと話されていた。

六月九日渋谷ジャンジャンで「神の道化」を再演する。

一部のコンサートの、水牛楽団のダンサー田川律の踊り付きでピアノ五手連弾「舞踏への誘い」「雨を待つ稲」田川さんの歌で「フジムラストア」高橋悠治のピアノ、三宅榛名作曲「ゴンタのタンゴ」坂本龍一「グラスホッ

パース」カーラ・ブレイ「オーリヨス・レ・ガート」楽団の器楽演奏で三宅榛名「いちめん菜の花」うた「最後のノート」祖母のうた「水牛楽団の歌」など十曲で構成した。

二部のパフォーマンス「神の道化」では、語り手に打楽器の伴奏がついてリズムにのりながら語るようになった。

二十一日、大阪バナナホール、渋谷ジャンジャンと同じプログラムをやる。百二十八ぐらいの人が集まった。

翌二十二日は沖繩ジャンジャン、那覇の国際通り、三越の隣のビルの地下にある。

水牛楽団初の沖繩公演で人がいったいどれぐらい来てくれるのか不安だった。リハーサルをいっつになく入念にやって、本番を待った。約三十人。それでも客席からは「田川！」などと声もかかり、いい感じで演奏。

翌二十三日、同じく第二回公演、四十人ぐらいの入りだ。みんなよく泡盛を飲んだ。二日酔いのまえまで東京へ帰る飛行機に乗る。

六月二十六日、横須賀市文化会館、非核市民宣言運動・ヨコスカの主催でニュージャージー入港とトホーク配備に反対するヨコスカ市民集会によばれた。

(福山敦夫)

*予約購読の申し込みと送金は郵便振替を利用して下さい。

口座名、水牛編集委員会
口座番号、東京四一九一七九二
購読料、一年分三〇〇〇円(送料共)
半年分一八〇〇円です。

*住所、氏名、電話番号、何号からというところを明記してください。

*本誌は次の書店にあります。
模索舎(新宿) ☎三五二二三五五七
木風舎(阿佐谷) ☎三三九八二二六六六
信愛書店(西荻窪) ☎三三三三四四九六一
アール・ヴィヴアン(西武池袋12F)
☎九八一〇一一一内線二九五五六
名古屋ウニタ書店 ☎七三二一一一三八〇
ワンラブブックス(下北沢) ☎四一一一八三〇二

水牛通信

第五巻第七号
一九八三年七月十日

定価 二〇〇円

発行人 堀田正彦

発行所 水牛編集委員会

〒154東京都世田谷区新町2-15-13

八巻方

電話〇三(四二五)九六五八

振替口座東京四一九一七九二

印刷所 株式会社プリントショップ